

ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントモデルの検討 —中断経験に着目して—

福田 誉*, 上林 功*, 古川 拓也*, 間野 義之*
増山 光洋**

Examining the sports commitment model for "Mama-san" volleyball
—Focusing on "Drop out experience"—

Homare Fukuda*, Isao Uebayashi*, Takuya Furukawa*, Yoshiyuki Mano
Mitsuhiro Masuyama**

Abstract

Using a sports commitment model that employs covariance structure analysis, this study focuses on practitioners of "Mama-san" volleyball and the factors in their continuance of the sport. We compare two models of the presence or absence of the "Drop out experience". The results of the hypothetical models support previous studies and demonstrate the validity of the models. In the comparison of whether practitioners have a "Drop out experience" or not, the results confirmed the differences in the models.

In order to have players continue "Mama-san" volleyball, emotional support such as "encouraging," "praising" and "expressing understanding" from those who have resumed their participation after dropping out can be important. In addition, the results suggest that similar support from others involved with "Mama-san" volleyball on a daily basis could help form their identity as a "Mama-san" volleyball player, and could lead to the implementation and continuation of the sport of "Mama-san" volleyball.

Key Word: "Mama-san" volleyball, Social Support, Athletic identity, Sport commitment, Drop out experience
キーワード: ママさんバレー、ソーシャルサポート、競技者アイデンティティ、スポーツ・コミットメント・中断経験

1. 緒 言

近年ママさんバレーでは比較的若い世代や高齢化に伴う実施者の減少が問題となっている。こうしたママさんスポーツの実施者減少には様々な要因が関連していると考えられる。例えば松永ら²⁷⁾は、子育て期の女性において「子育て」というものが女性のスポーツ参加に対する阻害要因を生み出していることなどを示している。一方、ママさんバレーにおいて主婦自らの「趣味」による繋がりは子育てとは違う新たな人間関係であり、新たなコミュニティの形成になる³⁸⁾とされており、阻害要因が緩和されることで再びその時間をママさんバレーに費やすようになればコミュニティの中で新たな人間関係を構築することになる。こうした家族以外とのコミュニケーションが女性の社会進出に繋がる可能性も考えられる。また、主婦にとってのスポーツ参加は一般女性のスポーツ参加以上に出産や育児、家事さらには仕事など諸制約を克服してのものであるだけに、社会進出に関していっそうの意義も深いものと考えられる³⁸⁾。こういった意味でも、ママさんバレー実施者の減少に歯止めをかけ、チーム数を維持する対策を検討することは重要であるといえる。

近年のスポーツ実施・継続に関する研究では、コミットメントの概念に着目した研究が行われている。コミットメントに関する研究²⁾はアメリカにおいて1960年代に始まっている。Scanlan, T.K. & Carpenter, P.J. & Schmidt, G.W., et al.³²⁾は、個人のスポーツ行動の実施や継続化を説明するのに有効な手段としてスポーツ・コミットメント理論を提唱している。スポーツ・コミットメントを「特定のスポーツプログラムへの参加または継続に対する願望や決意を表している心理的な状態」と定義しており、コミットメントが強く形成されている者ほど、スポーツとの結び付き、あるいはかかわりが深いことが明らかにしている。しかし、村上²⁸⁾は日本の文化や土壌にあった形に修正する必要性を指摘している。そこで、萩原ら¹¹⁾は、Scanlan, T.K., et al.^{31) 32)}のスポーツ・コミットメント尺度を援用し、競技スポーツに特化した日本語版尺度を作成しており、その信頼性と妥当性を確認している。コミットメントの援用や有用性についても研究が行われており、スポーツ・コミットメントがスポーツ行動の実施や継続化を説明するのに有効な手段として捉えることができる。わが国においては、萩原ら^{8) 9) 12) 13)}が、スポーツ・コミットメント形成につながるモデルの検討を行っており、社会的要因が心理的要因を媒介しスポーツ・コミットメントを形成する過程を明らかにしている。社会的要因では、スポーツ参加および習慣化を説明するとして「誘ってくれる仲間がいる」、「アドバ

* : 早稲田大学 (Waseda University)

** : 中央学院大学 (ChuoGakuin University)

(受付日: 2016年3月25日, 受理日: 2016年11月8日)

イスや指導をしてくれる人がいる」などの手段的支持と「すすめたり、ほめてくれる家族や仲間がいる」、「自分の事を理解してくれる家族や仲間がいる」などの情緒的支持から構成されるソーシャルサポートに着目しており^{14) 20) 21)}、心理的要因では競技者としての役割に対する同一性の程度を示す競技者アイデンティティーに着目している^{10) 18) 29)}。そこで本研究では、ママさんバレー実施者を対象に、ママさんバレーに関するソーシャルサポートの認知と競技者アイデンティティーを媒介変数とした萩原らのスポーツ・コミットメントモデル⁹⁾を用い、ママさんバレーへの参加中断経験の有無によるモデルの比較を行うことにより、ママさんバレー中断からの復帰に関する要因やサポートについて明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

1. 調査項目

測定指標は、萩原^{9) 13)}が示したスポーツ・コミットメントモデルの測定項目に従い、スポーツソーシャルサポート尺度（手段的・情緒的支持の6項目2因子構造）、競技者アイデンティティー尺度（7項目1因子構造）、スポーツ・コミットメント尺度（6項目1因子構造）を援用した。それぞれの尺度の信頼性・妥当性については先行研究において確認されている^{11) 18) 22)}。

2. 予備調査および内容的妥当性の検討

調査項目については、ママさんバレーでの妥当性を確認するため、予備調査として東京都ママさんバレーボール連盟に登録されているママさんプレーヤー297名を対象に質問紙調査を行った。その後、スポーツマネジメントの専門家3名とスポーツ政策を学ぶ学生6名の計9名によって調査項目の内容的妥当性の検討、質問文の表現の検討、回答に対する評定方法の検討を行った。予備調査および内容的妥当性の検討の結果、関係者ヒアリングのなかでママさんバレーは「競技スポーツの側面よりもレクリエーションや生涯スポーツの側面での実施について重視している」との考えが示され、全ての項目において「スポーツ」という表現を「ママさんバレー」に、「競技者」という表現を「プレーヤー」に変更し、5段階評定尺度に統一し、本調査に臨んだ。

3. 本調査の対象者および手続き

調査対象は、第40回記念やまゆり杯・小田急争奪「神奈川県家庭婦人バレーボール大会」参加チーム（586チーム、6662人）のうち、神奈川県ママさんバレーボール連盟への説明の後、協力を得られた連盟登録者500名であった。質問紙への回答は任意とし、プライバシー保護についても、回答の内容は統計的に処理され、個別に公表することなく、第三者への漏洩および目的外使用も一切行わない

ことを付け加えた。質問紙は、属性として年齢、職業有無、末子年齢、バレー開始年齢、中断理由ほか、3つの尺度等について回答を求めた。中断理由では、ママさんバレーを始めて以降での理由について回答を求めた。回収した質問紙は431部で回収率は86.2%であった。分析に用いる項目が完全回答でないものを除外した結果、有効回答数は339部となり、有効回答率は67.8%であった。調査方法は質問紙郵送法によって実施した。質問紙は大会開会式に返信用封筒とともに配布した。回収期間は2015年11月12日～11月30日とした。

4. 分析方法

属性については χ^2 検定を行い、有意差が認められたものについては下位検定として残差分析を実施した。ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントモデル⁹⁾の妥当性の検討では共分散構造分析を実施した。尺度の収束的妥当性と弁別的妥当性にはAverage Variance Extracted (AVE)、モデルの適合度指標はComparative Fit Index (CFI)、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)、尺度の信頼性はCronbachの α 係数を使用した。その後、中断経験有無のモデルの差異を明らかにするため、中断経験有モデルと中断経験無モデルに対して多母集団による同時分析を実施した。中断経験は1カ月以上（練習：月10回以上に相当）ママさんバレーに参加できなかったことを分類の基準とした。検討手順は、小塩³⁰⁾、豊田³⁷⁾の方法に準拠して実施した。モデルの適合度指標はComparative Fit Index (CFI)、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)、Akaike's Information Criterion (AIC)を使用した。統計解析パッケージはIBM SPSS Statistics23.0およびAMOS22.0を使用した。なお、本研究における統計的有意水準は5%とした。

3. 結 果

1. 調査対象者の特性

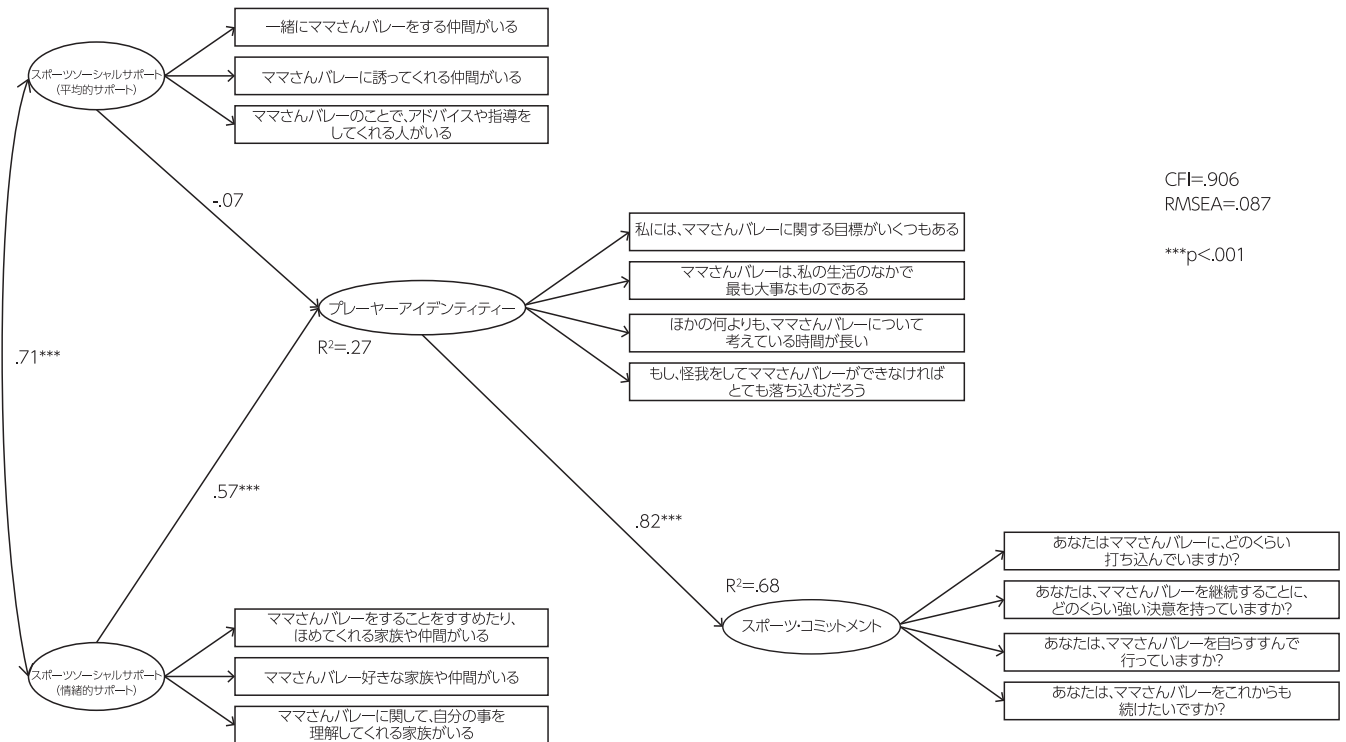
表1に調査対象を「中断経験あり」と「中断経験なし」に分類し属性をまとめた。その結果「中断経験あり」は全体の61.1% (n=207)、「中断経験なし」は38.9% (n=132)を占める値となった。属性で χ^2 検定を行った結果、【年齢】と【職業有無】では、中断経験の有無に有意な差は認められなかった。【末子年齢】では中断経験の有無に有意な差が認められ ($p<.01$)、残差分析を行った結果「中断経験あり」では未就学児が、「中断経験なし」では子どもなしと小学生が有意に多かった。【バレー開始】では中断経験の有無に有意な差が認められ ($p<.05$)、残差分析を行った結果「中断経験あり」では22歳以下が、「中断経験なし」では23歳以上が有意に多かった。中断理由（複数回答）では出産・育児の回答数が45.7%、次いで怪我が26.8%、引ッ

表1 調査対象者の特性 (神奈川県)

	全体	中断経験あり			中断経験なし			X ² 値	p値
		度数	%	調整済み●●	度数	%	調整済み●●		
【実施者】	339	207	61.1%		132	38.9%			
【年 齢】	20~29歳	3.2%	6	2.9%	—	5	3.8%	6.573	n.s.
	30~39歳	13.9%	26	12.6%	—	21	15.9%		
	40~49歳	42.5%	88	42.5%	—	56	42.4%		
	50~59歳	30.1%	59	28.5%	—	43	32.6%		
	60歳以上	47.3%	28	13.5%	—	7	5.3%		
	平均	43.3%							
【職業有無】	有職 (フルタイム)	25.7%	47	22.7%	—	40	30.3%	3.628	n.s.
	有職 (パート・アルバイト)	56.0%	117	56.5%	—	73	55.3%		
	専業主婦	18.3%	43	20.8%	—	19	14.4%		
【末子年齢】	子どもなし	5.3%	7	3.4%	-2**	11	8.3%	13.583	<.01
	未就学児	12.7%	33	15.9%	2.3**	10	7.6%		
	小学生	20.1%	33	15.9%	-2.4**	35	26.5%		
	中学生	12.7%	26	12.6%	-0.1	17	12.9%		
	高校生以上	49.3%	108	52.2%	1.3	59	44.7%		
【バレー開始】	22歳以下	63.7%	143	69.1%	2.6*	73	55.3%	6.620	<.05
	23歳以上	36.3%	64	30.9%	-2.6*	59	44.7%		
【中断理由】	出産・育児	45.7%							
	複数回答 怪我	26.8%							
	引越	8.0%							

n.s. : 非有意 * : p<.05 ** : p<.01

図1 ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメント形成モデル



越しが8.0%であった。

2. 共分散構造分析を用いたスポーツ・コミットメントモデルの検討

スポーツソーシャルサポート尺度は2因子について弁別的妥当性の検証を行った。その結果、2因子のAVEは相関係数($r=.71$)の平方よりも高い値であり、弁別的妥当性を有していることが確認された。次に収束的妥当性を支持するAVEを算出した結果、プレーヤーアイデンティティーとスポーツ・コミットメントで基準の.50を下回ったため内容的妥当性に配慮しながら標準化推定値の低い項目を削除した結果、プレーヤーアイデンティティーが.50(7項目から4項目)でスポーツ・コミットメントが.52(6項目から4項目)となり尺度の収束的妥当性が確認された。修正後の尺度を用いモデル適合度を検証した結果、CFI=.906、RMSEA=.087であった。RMSEAが.08を上回ったが、.10未満のため³⁷⁾モデルの適合度は許容可能な値と判断しその後の分析を進めた。すべての標準化したパス係数は手段的支持からプレーヤーアイデンティティーのパスを除き、全てのパスにおいて0.1%水準で有意であった。また、決定係数(R²)はプレーヤーアイデンティティーで.27、スポーツ・コミットメントで.68であった(図1)。それぞれの尺度の信頼性についてはCronbachの α 係数を算出し、手段的支持因子.68、情緒的支持因子.79、プレーヤーアイデンティティー.78、スポーツ・コミットメント.81で、概ね良好な値を得ることができたため次の検討に進んだ。

3. 多母集団による同時分析の結果

多母集団の同時分析により中断経験有無のモデルの比較を実施した。潜在変数間について同じ構造を各モデルに仮定しているため、推定値の違いのみを想定する配置不変性を仮定したモデルの検討を行った。まず、中断経験有無のモデルについて母集団毎の分析を行った。その結果、中断経験有のモデルはCFI=.887、RMSEA=.093となり、中断経験無のモデルはCFI=.891、RMSEA=1.101であった。両モデルにおいてCFIが.90を下回り、中断経験無モデルのRMSEAの値において許容範囲を超えたが「次の手順の分析で集団を同時に分析することで適合度が向上する場合もあるため、ここで分析を中断はしない方が良い4)」とされており、次の手順に進み各モデルの配置不変性の検討を行った。中断経験の有無における多母集団の共分散構造分析を実施した結果、モデルの適合度はCFI=.888、RMSEA=.068となり許容可能な値を示した。本研究で用いたモデルの構造で配置不変性(等値制約なし)を確認したため、さらに、モデルの配置不変の妥当性を検討する

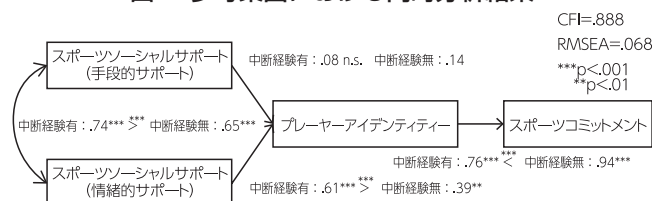
ためパス係数に等値制約を置いたモデルを設定し、モデルにおける集団の異質性、等質性を検討した。設定したモデルはモデル1(配置不変モデル)、モデル2(共分散、情緒的支持からプレーヤーアイデンティティー、プレーヤーアイデンティティーからスポーツ・コミットメントの3つのパスに等値制約)、モデル3(全てのパスに等値制約)であった。3つのモデルの適合度指標は表2のとおりである。表2からモデル1のCFI、RMSEAの適合度が最も良好であり、さらにモデルの安定度を示すAICの値が最も低かったため最終的にこのモデル1を採用した。この結果から、中断経験の有無で異質性を考慮することは妥当であると判断された。

表2 各モデルに対する共分散構造分析の主な結果

制約	CFI	RMSEA	AIC
モデル1(なし)	888	.068	500.798
モデル2(一部)	873	.072	529.745
モデル3(全て)	870	.072	531.290

両モデル間でパラメータの差の比較を行ったところスポーツソーシャルサポート尺度で、中断経験有モデルの方が値が大きく有意な差が認められた($p<.001$)。同様に情緒的支持からプレーヤーアイデンティティーへのパス係数においても、中断経験有モデルの方が値が大きく有意な差が認められた($p<.001$)。また、プレーヤーアイデンティティーからスポーツ・コミットメントへのパス係数においては、中断経験無モデルの方が値が大きく有意な差が認められ($p<.001$)、それぞれ中断経験の有無によるモデル間で差があることが明らかになった(図2)。

図2 多母集団における同時分析結果



4. 考 察

本調査の結果から、中断経験の有無による調査対象者の特性をみると【末子年齢】で未就学児が「中断経験あり」のほうが有意に多くなっており、松永ら²⁷⁾が「子育て」が女性のスポーツ参加に対する阻害要因を生み出していることを示しているように中断経験は【末子年齢】と関連しており、参加への阻害要因になっていた可能性が示唆される。また、【バレー開始】では「中断経験なし」のほうが23歳以上で有意に多くなっており、バレー開始が遅い人たちは中断経験を持つ人が少なく、若いころからバレーをやっていた人には中断経験を持つ人が多いことが明らかになり、中断経験は【バレー開始】と関連していることが示

唆された。子育て期を過ぎたことによって阻害要因が緩和されるなど、年齢的にも落ち着いてからママさんバレーを初めて経験していることが推察される。ママさんバレー実施者は主婦であり、本調査では出産・育児などが主な中断理由になっている(表1)。日本女性は主婦役割の中でも母親役割を重視³⁴⁾しており、スポーツの参加に対し出産時はもちろんのこと末子年齢によって社会心理的阻害要因があること⁶⁾が明らかにされている。中断経験が過去の事で解釈に注意が必要であるが、【末子年齢】でみると「中断経験あり」では未就学児が多くなっており(表1)、中断からの復帰には末子年齢による社会心理的阻害要因が影響する可能性も考えられる。

ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントモデルに着目すると、先行研究⁹⁾では男女のモデルを比較した結果、女性競技者では情緒的サポートのみ競技者アイデンティティーへ有意な影響を与えていることが明らかにされている。本研究は先行研究を支持する結果となった。また、プレーヤーアイデンティティーとスポーツ・コミットメントの関係においても、アイデンティティーを強く形成していればコミットメントの程度が高まるという関連が明らかになり先行研究³⁾⁹⁾を支持する結果となった。さらに磯谷ら¹⁹⁾は、成人女性は友人などの非血縁者からのサポートが自己のアイデンティティー形成を高めることを明らかにしており、ママさんバレーにおいて情緒的なサポートを血縁者である家族からはもちろんのこと、非血縁者であるチームメイトの身近な人などからも行なうことがママさんバレープレーヤーとしての自己を形成し、スポーツの実施・継続行動に関連のあるコミットメントを高めるという可能性が示唆された。しかし、決定係数(R²)をみると、社会的要因であるスポーツソーシャルサポートはプレーヤーアイデンティティーの約27%の説明力と若干低くなっており、社会的要因として捉えたスポーツソーシャルサポート以外の他の要因もある可能性が示唆された。

中断経験有無のモデルで多母集団の同時分析を実施した結果をみると、スポーツソーシャルサポート、情緒的サポートとプレーヤーアイデンティティー間、プレーヤーアイデンティティーとスポーツ・コミットメント間でモデルの差異を確認することができた(図2)。スポーツソーシャルサポートの手段的サポートと情緒的サポートの関係において、中断経験のある人の方が手段的サポートおよび情緒的サポートの関連性が高いことが明らかになった。中断した経験のある人は身近な周りの人からの手段的サポートや情緒的サポートを受けて復帰しており、その過去の経験が中断経験の有無に差を生じさせたと考えられる。次に、情緒的サポートとプレーヤーアイデンティティーの関係において、中断経験のある人の方が情緒的サポートの認知がより強くママさんプレーヤーとしての自己を形成している

ということが明らかになった。ソーシャルサポートと競技者アイデンティティー形成においては関連性があること⁷⁾⁹⁾¹⁹⁾や性別に差があること¹⁹⁾が先行研究で明らかになっている。特に、磯谷ら¹⁹⁾は女性の特徴として信頼できる交流を基盤として自己への信頼が高まり、周囲から阻害されていないことが自我同一性を確立させる上で重要であることを示唆している。ママさんバレーへの参加動機として「みんなで集まることが好き」などの集団帰属志向などがある⁵⁾ため、中断によってママさんバレーというコミュニティから離れた際にチームメイトからの「また一緒にバレーをしよう」などの誘いがママさんバレープレーヤーである自己を再認識し、強くその役割を形成することに影響している可能性があり、中断経験の有無で差が生じたと考えられる。また、プレーヤーアイデンティティーとスポーツ・コミットメントの関係において中断経験のない人の方がママさんプレーヤーとしての自覚を認知し、コミットメントをより強く形成していることが明らかになった。すでに競技者アイデンティティーを有する者はスポーツ・コミットメントを強く形成していることは先行研究³⁾⁹⁾でも明らかになっている。ママさんバレーにおいて中断した経験のない人は、子育てなどの阻害要因が少なく参加しやすい環境にいる可能性があるため、中断経験の有無で差が生じたと考えられる。ママさんバレー実施者の減少に歯止めをかけチーム数を維持するためには、現在中断をしている状況から復帰をした実施者の体験からスポーツすることを「すすめる」、「ほめる」、そして「理解をする」などの情緒的なサポートが重要であるといえる。それらをママさんバレーに関わる身近な他者が日常的に行うことによって彼女たちのママさんバレープレーヤーとしての自己を形成し、ママさんバレーの実施・継続化につながる可能性が示唆される。

この家庭婦人カテゴリーの競技参加を発展させることは、ママさんバレー人口の拡大はもちろんのこと、それによりさらに新たにバレーボールを始める子どもたちへのきっかけとしても期待できることからママさんバレー人口の増大と発展はバレーボール界全体からみても非常に見過ごすことのできない重要な視点であるといえる。近年では、個人・社会志向性を社会的要因とするモデルの検討¹⁵⁾も行われているが、ソーシャルサポートは「個人を取り巻く重要な他者からの有形・無形の援助」と定義されている¹⁶⁾。主婦で女性でもあるママさんバレー実施者が中断をしている状況から復帰するには、そうした援助が必要になるというソーシャルサポートを社会的要因と捉えることができる。

しかしながら、第40回記念やまゆり杯・小田急争奪「神奈川県家庭婦人バレーボール大会」参加チーム(586チーム、6662人)のうち、神奈川県ママさんバレーボール連盟登録者500名を対象とし回収率は86.2%であったが、完

全回答のみを採用したことで有効回答率が67.8%に低下したことについて、アンケート設計において考慮しきれていなかった点と、過去に中断から復帰した時の体験を現在において調査しているため、現在中断している人については全く言及できず、まだ多くの潜在的にバレーボール活動に参加したいと考えているプレーヤーに触れられていない点において課題を残した。また、ママさんバレーボール連盟に登録していない実施者も多数存在することが想定されるためそのようなプレーヤーにおいても同様である。さらには女性の有職率との関連性についても着目すると、女性の有職率は1975年には25～29歳で41.4%、30～34歳で43.0%であったものが、2011年には前者が72.8%、後者が64.2%と過去に比べ上昇の傾向は明らかである。加えて、「働きたい・就業」への意欲は女性全体の51.1%が欲求として社会に求めており、中でも子どもを持つ母親のそれは40.7%といった調査結果も見受けられる。働かなければならない経済状況や就業による時間の制約もスポーツ活動の制限に繋がっているのも事実である。スポーツの実施・継続に関しては研究データの集積と縦断的調査が必要であり、現在中断している人々を含めて検証することで具体的なサポートや復帰までのプロセスなどの知見が得られると考えられる。本研究で用いた尺度は、予備調査によってママさんバレーの実態に合わせ修正を試みた。他の競技で本尺度をいる際には各スポーツや状況に合わせた尺度の修正を行い、それらを用いた検証が必要となる。わが国においてスポーツ・コミットメントモデルに基づいた研究の蓄積は多いとはいえず、さらに成人女性を対象に検討した研究は少ない。職業婦人のようなバレーボール以外に主たる業務や諸制約を抱える人のスポーツの実施・継続を向上させるためにもこのような研究を重ねていくことは重要であると考えられる。

5. 結 論

本研究では、ママさんバレー実施者を対象に、ママさんバレーに関するソーシャルサポートの認知と競技者アイデンティティを媒介変数とした萩原らのスポーツ・コミットメントモデル⁹⁾を用い、ママさんバレーへの参加中断経験の有無によるモデルの比較を行うことにより、ママさんバレー中断からの復帰に関する要因やサポートについて明らかにすることを目的とした。ママさんバレープレーヤーにおける中断経験においてスポーツ実施・継続を促進するために有効な要因として、中断からの復帰にはソーシャル的なサポートや特に身近な他者からのスポーツすることを「すすめる」、「ほめる」、そして「理解をする」などの情緒的なサポートが有効であることが明らかになった。

(注1) ママさんバレーの登録規定は、基本的に各都道府県のママさんバレー連盟ごとに定められており、

近年は実施者減少の対策として規制緩和が進んでいる。例えば神奈川県登録規定では大原則として既婚者となっているものの45歳以上の未婚者も登録可能となっており、さらに大会ごとでも参加規定が異なっている。

文 献

- 1) 荒井貞光, 松田泰定; スポーツ行動に関する実証的研究(2), 体育学研究 Vol.22, pp.137-152, 1977.
- 2) Becker, H.S.; Notes on the concept of commitment, American journal of Sociology, pp.32-40, 1960.
- 3) Chen, S., Snyder, S., Magner, M.; The effects of sport participation on student-athletes' and non-athlete students' social life and identity, Journal of issues in intercollegiate athletics, Vol.3, No.1, pp.176-193, 2010.
- 4) CSI 統計分析セミナー; 2014年度秋学期第6回: Amosを用いた多変量解析2, 2014 https://csi.rikkyo.ac.jp/seminar/lecture_resource/%E7%B5%B1%E8%A8%88%E5%88%86%E6%9E%90%E3%82%BB%E3%83%9F%E3%83%8A%E3%83%BC2014%E7%A7%8B%E5%AD%A6%E6%9C%9F%E7%AC%AC6%E5%9B%9E%E8%B3%87%E6%96%99%20.pdf. (情報取得 2015/12/27)
- 5) 海老原修; スポーツへの再参加にみる参加動機と参加阻害要因の関連性: 家庭婦人バレーボール参加者における再社会化の検討, 日本体育学会大会号 No.46, p.182, 1995.
- 6) 藤本淳也, 松永敬子, 松岡宏 他; 女性のスポーツ参加阻害要因に関する研究 II: 12歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦者行動について, 大阪体育大学紀要 Vol.36, pp.84-94, 2005.
- 7) 福岡欣治, 友野恵都子, 橋本宰 他; 女子学生と既婚中年女性におけるソーシャル・サポート・ネットワークと自我同一性, 静岡県立大学短期大学部研究紀要 Vol.14, pp.63-76, 2000.
- 8) 萩原悟一; スポーツ・コミットメント形成モデルの構築-ソーシャルサポートの授受と競技者アイデンティティの関連を基軸として, 九州工業大学博士学位論文, 2014.
- 9) 萩原悟一, 磯貝浩久; スポーツ・コミットメントの形成に関する競技者アイデンティティとソーシャルサポートの検討, スポーツ産業学研究 Vol.23, No.2, pp.227-239, 2013.
- 10) 萩原悟一, 磯貝浩久; 競技者アイデンティティに関する研究: 日本語版尺度の再検討および競技レベル, 高校生・大学生競技者の比較, 運動とスポーツの科学

- Vol.19, No.1, pp.45-51, 2013.
- 11) 萩原悟一, 磯貝浩久; 競技スポーツにおけるコミットメントの検討, スポーツ心理学研究 Vol.41, No.2, pp.131-142, 2014.
 - 12) 萩原悟一, 磯貝浩久; ソーシャルサポートの授受と競技者アイデンティティの関連に着目したスポーツ・コミットメント形成モデルの検討, 運動とスポーツの科学 Vol.20, No.1, pp.67-75, 2014.
 - 13) 萩原悟一, 磯貝浩久; スポーツにおける個人・社会志向性と競技者アイデンティティの関連を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルの検討, スポーツ産業学研究 Vol.24, No.1, pp.7-15, 2014.
 - 14) 萩原悟一, 磯貝浩久; スポーツチームにおけるソーシャルサポート提供: 受領尺度作成の試み, スポーツ産業学研究 Vol.24, No.1, pp.49-62, 2014.
 - 15) 萩原悟一, 磯貝浩久; スポーツにおける個人・社会志向性と競技者アイデンティティの関連を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルの検討, スポーツ産業学研究 Vol.24, No.1, pp.7-15, 2014.
 - 16) 久田満; ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題, 看護研究 Vol.20, No.2, pp.170-179, 1987.
 - 17) 池田勝, 江橋慎四郎, 永吉宏英; 勤労青少年のスポーツ実施を規定する要因の分析, 日本体育学会大会号 No.27, p.112, 1976.
 - 18) 磯貝浩久, Brewer, B.W., Cornelius, A.E. 他; 競技者アイデンティティに関する研究—評価尺度の作成と性, 文化, 競技レベル, 動機づけとの関係—, 財団法人ミズノスポーツ振興会 2001 年度研究助成金研究成果報告書, 2001.
 - 19) 磯谷俊仁, 岡林秀樹; 大学生の友人関係におけるソーシャルサポートの授受と自我同一性との関連, 明星大学心理学年報 No.30, pp.7-16, 2012.
 - 20) 板倉正弥, 武田典子, 岡浩一郎; 成人の運動行動と運動ソーシャルサポートの関係, ウォーキング研究 No.7, pp.151-158, 2003.
 - 21) 板倉正弥, 岡浩一郎, 武田典子 他; 運動ソーシャルサポートおよびウォーキング環境認知と身体活動・運動の促進との関係, 体力科学 Vol.54, No.3, pp.219-227, 2005.
 - 22) 菅宏規, 庄子博人, 岡浩一郎 他; スポーツソーシャルサポート尺度の開発—信頼性および妥当性の検討—, スポーツ産業学研究 Vol.21, No.2, pp.169-177, 2011.
 - 23) 小椋博, 影山健; 労働要因がスポーツ参加に及ぼす影響の分析: 重回帰モデルによる計量的研究, 体育学研究 Vol.22, No.5, pp.311-319, 1978.
 - 24) 金崎良三; スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参加に関する研究 (I): スポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試み, 健康科学 Vol.14, pp.35-42, 1992.
 - 25) 糸野豊, 池田勝, 山口泰雄; パス解析によるスポーツ参加の分析, 筑波大学体育科学系紀要 No.2, pp.23-30, 1979.
 - 26) 松田泰定, 東川安雄, 荒井貞光; スポーツ行動に関する実証的研究 (3): スポーツ種目選択行動について, 体育学研究 Vol.24, No.1, pp.1-11, 1979.
 - 27) 松永敬子, 藤本淳也, 松岡宏高 他; 女性のスポーツ参加阻害要因に関する研究 I: 6 歳以下の子供を持つ母親のスポーツ参加について, 大阪体育大学紀要 Vol.36, pp.71-83, 2005.
 - 28) 村上雅彦; 運動継続: 社会学レビュー, 体育の科学 Vol.55, pp.12-13, 2005.
 - 29) 奥田愛子, 中込四郎; スポーツマン的アイデンティティの志向性と職業決定行動との関係, 体育学研究 Vol.37, No.4, pp.393-404, 1993.
 - 30) 小塩真司; はじめての共分散構造分析—Amos によるパス解析 [第 2 版], 東京図書, 2014.
 - 31) Scanlan, T.K., Simons, J.P., Carpenter, P.J. et al.; The Sport Commitment Model: Measurement development for the youth-sport domain, Journal of Sport & Exercise Psychology, Vol.11, pp.54-64, 1993.
 - 32) Scanlan, T.K., Carpenter, P.J., Schmidt, G.W. et al.; An introduction to the sport commitment model, Journal of Sport & Exercise Psychology, Vol.15, pp.1-15, 1993.
 - 33) 多々納秀雄, 厨義弘; スポーツ参加の多変量解析 (I): 数量化理論第 II 類による要因分析, 健康科学 Vol.2, p.104, 1980.
 - 34) 高橋美波; 家庭婦人バレーボールの人類学的研究, 東北人類学論壇 No.11, pp.63-75, 2012.
 - 35) 徳永幹雄, 多々納秀雄, 橋本公雄 他; スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究 (I): ランニング実施に対する Fishbein の行動予測式の適用, 体育学研究 Vol.25, No.3, pp.179-190, 1980.
 - 36) 徳永幹雄, 多々納秀雄, 橋本公雄 他; スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究 (II): ランニング実施者と非実施者の諸属性の比較, 健康科学 Vol.2, pp.91-101, 1980.
 - 37) 豊田秀樹; 共分散構造分析 [Amos 編]—構造的式モデリング—, 東京図書, 2007.
 - 38) 内海和雄; 「ママさんバレー」の実態と意義, 一橋論叢 Vol.125, pp.115-131, 2001.